高知県自然観察指導員連絡会会報

ネイチャー高知

No37　2011 年 7 月 31 日発行

自然しらべ 2011　　テーマは「チョウの分布　今・昔」です

NACS-J 主催の自然しらべ 2011 では、主に次のようなチョウを探しています。
アオスジアゲハ、イシガケチョウ、ウラギンシジミ、クジャクチョウ、タテハモドキ、ツマグロヒョウモン、ナガサキアゲハ、ミカドアゲハ、モンキアゲハ

永年高知の昆虫を調査している人に聞きますと、高知のチョウの減り具合はすざましいもので、20 年ほど前には、ごく普通に見ることができた種が、最近はなかなか見ることができなくなったそうです。今一度、チョウに目を向けて、身の廻りにどんなチョウがいるのか観察してみましょう。
今度の調査は、確認したチョウについては、写真を撮影して報告しなければなりませんので、少しハードルが高いですが、性能のよいデジタルカメラも出回っています。これを機会に昆虫の写真撮影にもチャレンジしてみてください。
自然しらべ 2011 で探している蝶のうち、比較的探しやすいチョウは次のとおりです。

※　調査マニュアルが入用の方は事務局までご連絡ください。

わたしのフィールドノート 22

妖しさのとりこ

田城　光子

シタキソウという、つる性の植物がある。小さな花をつけるガガイモ科の中では、ひときわ大きくて白く、強い香りを放つ花が咲く。先がぴんと尖った長い果実がつくと、ガガイモ科であることを納得する。海岸から比較的標高の高い内陸部にまで広く分布するが、開花時期が梅雨の頃で家にこもりがちになるせいか、花にお目にかかることがあまりない。それでも今年はこの時期にガガイモ科カモメヅル属の調査を集中的に行ったおかげで、シタキソウ属シタキソウの花もたくさん見ることができた。シタキソウは観賞に値する花である。

高知県植物誌によれば、ガガイモ科カモメヅル属は県内に１０種が生育するとされ、幡多にはそのうち、アオカモメヅル、フナバラソウ、ホウヨカモメヅル、イヨカズラ、スズサイコ、ヤマワキオゴケの６種が確認されている。アオカモメヅルは生育地が限局されてはいるが個体数はかなり多い。淡黄緑色の花は小さく、あまり花の存在が気付かれることはない。棚田の斜面に生えるフナバラソウは、一本ずつ杭を打ち草刈の時にも刈り残すという耕作者の努力で、スズサイコやヒメユリ、キキョウなどとともに守られてきた。しかし高齢化が進み、耕作放棄地がだんだんと広がりつつある今、予断を許さない状況になってきている。ヤマワキオゴケは、これまでクサナギオゴケと認識していたが、すべてヤマワキオゴケだったようである。わたしには違いがよくわからない。小さな谷川を挟んだスギ、ヒノキの植林内の、苔の生えた岩の間や湿潤な林床で大群生している。個体数は多いが開花は非常に少なく、さらに結実となると見つけるのが容易ではない。昨年たった一個、ガガイモ科の特徴的な果実を発見した時は、宝探しで宝を掘りあてた気分だった。

一方、日当たりの良い海岸でたくさんの花を咲かす種がある。ホウヨカモメヅルである。豊予海峡を挟んだ大分県と愛媛県の海岸に分布するといわれ、名前も豊予海峡に由来する。2004 年、新種として記載されている。ホウヨカモメヅルは、高知県西部の土佐清水市貝の川付近から大月町橘浦付近にかけての海岸線で、わたしたちも確認している。しかし足摺半島ではまだ確認していない。イヨカズラに似るが、茎の先端がつる状に長く伸びること、葉身の基部が心形になること、花が紅紫色であることなどが大きな違いだと思っていた。生育環境も、イヨカズラは海岸か

ら内陸部にかけてもかなり見られるが、ホウヨカモメヅルは直接潮風を受けるような海岸線だけではないかと考える。花崗岩の崖地の旧道の道端に、多く見る事が出来る。しかし、今年の調査ではさまざまな疑問や新しい気付きがあった。ホウヨカモメヅルの花の色はすべて紅紫色だと思っていたが、イヨカズラと同じ淡黄色（以下赤花、白花と表現する）のものがあるということ、イヨカズラとホウヨカモメヅルの区別の難しいものなどが、たくさん見られたのである。大岐海岸の岩場では、これまですべてイヨカズラだと思っていたが、茎はあまり立ち上がらず、つる状に伸びて他の植物にからまりながら花を咲かせているものがあり、その姿や楔形にならない葉の形なども含めて、ホウヨカモメヅルによく似ている。土佐湾側にもホウヨカモメヅルは生育するのかもしれない。これこそが典型的なホウヨカモメヅルではないかと思ったものは、葉の質がかなり硬く基部は心形、茎や葉柄、葉脈は花と同じような赤みをおび、茎は成長して花を咲かすようになると立ち上がらず他の植物などに絡まりながら長く伸びていた。約１ｍの間隔で生えていた全く同じような状態でつるになっていた二つの個体の一方は赤花、一方は白花のものもあった。柏島の手前、観音岩に続く遊歩道付近の照葉樹林内の林床では、つるを伸ばさず茎が直立し葉腋から赤花をつけたクロバナイヨカズラ、赤花のホウヨカモメヅル、白花のホウヨカモメヅルなどが入り混じって咲いていた。これらを見極めることはなかなか難しく、日頃の不勉強を反省した調査であった。

ガガイモ科の花はどれも小さく、花のつくりはラン科に似て、花粉の運ばれ方にも興味がわきそうだ。あんな小さい花からこんな？と、驚くような果実がつき、割れた果実からは少々妖し気な長い毛の生えた種子が飛びだす。その様子がまたおもしろい。

今、ちょっとだけ、ガガイモ科のとりこになっている。

写真左：イヨカズラ
写真右：ホウヨカモメヅル

安芸城跡の白蓮

松本　孝（自然観察指導員登録 NO. 17502）安芸市土居 981-3

■城のお堀と白蓮

安芸城跡のお堀には昔から蓮があり、今は陸橋の東側にありますが以前は西側にもありました。花は白です。

また「土佐の高知いまむかし」の本を見ると、昔は高知城のお堀にも一面に生えていて真っ白い花が顔をのぞかしていたと記されています。

安芸城跡お堀（陸橋の東側）（平成 19 年 7 月）

■「しろやま、たんけん」で白蓮の観察

私は安芸市立歴史民俗資料館（以下、歴民館と称します）と連携して、安芸城跡の森をフィールドに「しろやま、たんけん」というプログラムを年３回実施し今年で 11 年目に入ります。

夏は暑いのでそれまで行ってきませんでしたが、平成 21 年より、昔から今に伝わる暑い夏の過ごし方を感じることをあわせて、お堀の蓮の観察を実施しています。

蓮の観察では、歴民館の了解を得てお堀より採集した葉を用意。まず蓮の葉に水をかけるとどうなるか参加児童にたずね、水をはじく様子を皆で見ます。濡れたはずの葉を児童達が触れ、濡れていないことに葉の不思議を感じたり、児童が蓮の葉を傘のように持って大人がゆっくりと上から水をかけたりもしてみます。何度も水をかけて、その度に葉に触れます。この葉っぱで雨具を作ったら濡れないことを実感。葉が水をはじくことを研究し撥水効果の商品が生まれたことを話し、植物から私たちの身近な暮らしに役立つ研究がされていることに関心を持ってくれたらうれしい思いです。葉に触れ表面を実体顕微鏡で見てみます。

お堀では咲いた花を見つけ、開いてる様子の違いや「凛（りん）」とした姿の花、ろうと型になった状況を探したりしています。種は前年に歴民館の了解を得て採集しその硬さを実感します。

蓮の根はレンコン。正月のお節料理に入っている由来、市販のレンコン（徳島県産）で穴を見通してみたり、穴の数を数えたりしてみます。根は泥の中なので、穴は空気の通り道の役割ではと話しています。他にも、ハスとスイレンの違いを見たり、「ひ～らいた、ひ～らいた」の歌のレンゲは蓮のことなども話したりします。

歴民館の学芸員より、像の写真を提示し、泥の中からきれいな花が咲くことに込められた思いを、またお堀や桝形などについて現地で図を示しながら話をされます。

昔の屋敷の涼しい工夫を見たり聞いたり、室内では蚊帳を吊って話をしたりして、身近な自然と暮らしとのつながりを感じています。

安芸城跡のお堀の白蓮（撮影日／平成 19 年 7 月 2 日　午前 6 時～7 時）

■レンコンの産地の蓮の花

岩国のレンコンの蓮の花は白いと知り、広いレンコン田んぼに白い蓮の花が咲く風景を見たいと思っていたところ、７月、広島市へ行く用事があったので少し足を延ばして岩国市を訪れました。

現地に着いたのは午後２時前。南岩国駅の陸橋から見渡すと、その広さを実感します。午後は花は閉じていると思い巡ると、少しでも開いていた花があったので楽しめました。

とにかく広い一面のレンコン田んぼ。そこに咲く白い蓮の花。

朝は花がもっと開いている風景がぐるっと見えるかもと思うと、また見てみたいものです。

岩国レンコンの白い蓮の花（平成 23 年 7 月 17 日/岩国市）

朝はどんな風景
になるのだろう？

南岩国駅の陸橋より、広いレンコン田んぼが見渡せます（写真では納まらない広さ）

■朝、花をめでるひとときと地域の催し（白蓮まつり）

蓮はご存知のように朝の花。私は静かな中で凛とした姿の白い蓮の花をめでると心落ち着き、背筋がピンと伸びる思いです。セミが鳴きはじめるまでの時間帯が個人的にはおススメです。

例年、道沿いの植栽に近いところまで葉や花が伸び、葉も大きく、道から葉や花を間近に見ることができるのですが、今年はいつものような大きさでもなく、伸びもなく、どうしてでしょう。

「白蓮まつり」と称した地域の催しが今年で７回目を迎え、７月 24 日（日）に開催されました。

私は「安芸城跡の白蓮」と題したパネル作成をお手伝いさせていただき、せんえつながら、知っている範囲の蓮の話を来場された方たちにしています。

安芸城跡のお堀の白蓮（平成 23 年 7 月 24 日）

平成 19 年 7 月（最初の写真）と比べてみても、その違いがわかります
（平成 23 年 7 月 24 日）

この日も数種類のトンボが
お堀の上を飛んでいました

「へーえ」と驚いた話　　石立山　深山中のオランダイチゴ

坂本　彰

タヌキという動物は、時には人家の近くに現れたりして、私たちにとって身近な存在です。また、童謡や民話の素材としてもよく登場します。信楽焼の狸の置物は、私のようなお腹の出た酒好きにとっては、まるで自分の姿のようにも見えますが、あらはあれで結構いわれがあって縁起ものだそうです。

信楽狸八相縁喜

「笠」　思わざるは悪事災難避ける為用心常に身を守る笠
「目」　何事も前後左右に気を配り正しく見つむることを忘れめ
「顔」　世は広く互いに愛想よく暮らし道を以って務めはげまん
「徳利」恵まれし飲食のみにことを足利て徳はひそかに我につけん
「通」　世渡りは先ず信用が第一ぞ活動常に四通八達
「腹」　もの事は常に落つきさりながら決断力の大胆をもて
「金袋」　金銭の宝は自由自在なる運用をなせ運用をなせ
「尾」なに事も終わりは大きくしっかりと身を立てるこそ真の幸福

ところで、このタヌキには登山の途中では　めったにお目にかかかれません。活動する時間帯を夜間に限っているためでしょうが、夏の日の長い季節には、日中どのような過ごし方をしているのでしょう？　「多分寝ゆうろう」「狸寝入り？？？」

姿は見せないものの、その痕跡、特に「ため糞」という、いわばタヌキの共同トイレはよく見かけます。香美市物部町の石立山もタヌキの通路と登山道が重なっているのか、登山道脇にため糞がたくさんあります。これもその一つですが、ため糞からイチゴ（オランダイチゴ）が発芽していました。オランダイチゴ類の繁殖方法はもっぱら走出枝で、種子から繁殖することはないだろうと思っていたので、少し驚きました。また、ため糞の位置は、登山者もあまり利用しない石立山頂上（三角点）の南から西に延びた尾根の末端付近で、近くの集落からは水平距離で約 600m、高度差で約 300mもある山中でした。えさを求めてえらい距離を移動するものだと驚きましたが、熟れたおいしいイチゴを食べるためにはこのくらいの距離は造作なかったのかもしれません。タヌキを研究した方によると、一晩で高度差 500mを移動する個体もいたそうです。こちらも「へーえ」です。

タヌキのため糞について

本種には複数の個体が特定の場所に糞をする「ため糞（ふん）」という習性がある。1 頭のタヌキの行動範囲の中には、約 10 か所のため糞場があり、1 晩の餌場巡回で、そのうちの 2、3 か所を使う。ため糞場には、大きいところになると、直径 50cm、高さ 20cm もの糞が積もっているという。ため糞は、そのにおいによって、地域の個体同士の情報交換に役立っていると思われる。糞場のことを「ごーや」や「つか」と呼ぶ地方がある

（「ウィキペディアフリ―百科事典」から引用）

海岸の植物観察会で新しい帰化植物が見つかりました

5 月 22 日手結海岸で鴻上泰さん（元牧野植物園職員　土佐植物研究会所属）を講師に迎え、海岸の植物観察会を開催しました。
ちょうど別の団体の行事と重なったため、参加者は 4 名と異例の少なさでしたが、手結海水浴場から大出の浜にかけての海岸を歩き、砂浜や磯に咲く多くの植物を観察することができました。
観察の途中、新しい漁港の後背地で、見たことのないバラ科と思われる植物が目に入りました。講師の鴻上さんも見たことがないとのことで、写真に収めるとともに、1 株採集し標本にして同定しました。その結果、ヨーロッパ原産の帰化植物オキジムシロ（*Potentilla supina* L.）で、高知県植物誌にも記載がなく、これまで高知県では採集されていない種であることが分かりました。

行事案内

初秋の草原の植物観察会

恒例の皿ヶ峰での観察会です。残暑が続く中、そこまで来ている秋を感じることができます。
ホソバヒメトラノオ、ヒメノハギなど貴重な植物もちょうど花の時期で、観察することができます。
参加希望者はあらかじめ事務局又は講師の稲垣会長まで申し込んでください。
日時　2011 年　９月４日（日曜日）　　午前９時～12 時まで
場所　高知市皿ヶ峰一帯
講師　稲垣典年さん（高知県自然観察指導員連絡会会長）
集合場所　筆山頂上西　皿ヶ峰登山口駐車場

他団体行事案内

シンポジウム「みんなで調べて記録しよう　鏡川の今」

日時　2011 年９月 19 日（月曜日・敬老の日）　午後１時 30 分から４時 30 分

場所　高知市鷹匠町２丁目 1-43

　　高知市役所たかじょう庁舎６階会議室

内容

・　鏡川の保全について

・　鏡川自然塾構想について

・　事例発表（仮題）

（それぞれの分野から、鏡川流域の生きものの現状、市民参加による調査の成果、これからの課題・取り組む内容について発表します）

鏡川の魚類相	発表者　高橋弘明
みんなで作った高知県植物誌の取り組み	発表者　鴻上泰
鏡川流域において確認されているほ乳類	発表者　谷地森秀二
鏡川流域の野鳥	発表者　日本野鳥の会高知

・　発表者との意見交換（30 分）

※NPO 法人環境の杜こうちでは、鏡川自然塾」をこの秋に開校することにしています。この鏡川自然塾の内容をよく理解していただくため、また、大学、市民団体、行政が連携して地域の自然を知ることの意義を確認するために、このシンポジウムを開催するものです。

****

「ネイチャー高知」の原稿を募集します

「ネイチャー高知」は、高知県自然観察指導員連絡会の機関紙として、１月、７月の年２回発行しています。自然保護に関する主張やエッセイ、フィールドの紹介など何でも結構ですので、どしどし投稿ください。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

NO　37

事務局　780-8075　　高知市朝倉南町 3-51-1　坂本彰　方

TEL＆FAX　088-850-0102

E-Mail　akira@baobab.or.jp